



Title	『竹斎』 : モデル論への試み
Author(s)	福田, 安典
Citation	語文. 1991, 57, p. 15-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68834">https://hdl.handle.net/11094/68834</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『竹齋』

—モデル論への試み—

福田 安典

『竹齋』は近世小説史上、高い評価を与えられている。しかし、その着想の源泉たる竹齋についての理解は諸説様々である。そもそも竹齋が何故に戯医でなければならなかったのか。東下りの前に彼を傍観者に追いやってまで京見物を描く意味は何であったのだろうか。更に基本的な疑問として、彼の名の「竹齋」に由来はあるのだろうか、それとも当作品で創造されたものなのだろうか。本稿では叙上の問題点を考察する足がかりとして一つのモデル論を提示したい。本文は「竹齋」諸本の中で最も古いと思われる古活字十一行本に拠り、適宜漢字を宛てた。

本論に入る前に、作者について基本的な資料を確認しておく。  
(傍点、筆者、以下同)

御典葉の道三に竹庵にさかひのト養渡辺玄吾にはぎの春庵道永道  
竹竹齋などが (医者くどき木やり「淋敷座之慰」所収)

この歌謡では恰も実在の人物の様に竹齋の名が記されている。亦、

傍点部「御典葉の道三」則ち曲直瀬道三も竹齋と並んで記されている。「竹齋」の作者、富山道治は延寿院こと曲直瀬玄朔(二代目道三)に医学を学んだ人物であることが既に指摘されている<sup>(1)</sup>。この歌謡で竹齋の名と同時にその師の名が唄われていることに注意したい。「竹齋」とこの曲直瀬とは存外、深い関わりを持っているのではないだろうか。「竹齋」と曲直瀬がどこまで深く関わるのか、これを本稿の出発点としたい。

## 一 知苦齋と竹齋

従来、「竹齋」という名については次の「書言字考」の記載が引かれ<sup>(2)</sup>。

<sup>ナククサイ</sup> 知苦齋 本朝醫家之謙稱。又呼庸醫云爾。

この記述を以て、いかにも当時から庸医を「竹齋」と読んでいたかの如く解釈されている。しかし、そう考えると次の疑問点が生じ

る。

一、「書言字考」は「竹齋」より後に成立した。以前の辞書類に「知苦齋」の語が見えず、「竹齋」の流行に影響されて逆にこの語が増補された可能性がある。

二、「ちく」について「知苦」と「竹」とでは表記が異なる。

三、記述から見て、医者の謙称が第一義であり、庸医は第二義ではないだろうか。

以上の点を考える時、「書言字考」の記載を以てただちに竹齋を庸医の別名だとするにはやはり躊躇せざるを得ないであろう。

ここで当然問題となるのが「竹齋」冒頭の登場人物紹介の記述である。

山城の国に藪医師の竹齋とて、

又いらみの介とて郎等一人あり。

いらみの介は明らかに先行作「恨みの介」のもじりである。又、藪からの発想で竹といらみを案出したと考えるならば、竹齋も何かの語をもじって「竹の齋」と命名したと考えるのが妥当であろう。この竹齋の典拠として、先程の既に医者の謙称として存在していた「知苦齋」なる語を考えてみたい。

「竹齋」以前に、この「知苦齋」を名乗った医師が一人いる。（傍線、筆者。以下同）

雖知苦齋スナハクサイ 啓迪集以前之齋名也。法華文諸苦所因貪欲為本云々。

本此語者也。天正二甲戌年十一月十七日参内而被拝竜顔。剎以啓迪集備上覽。道三行年六十八歳之時。可救天下萬民醫書之端。苦字不可然之由有繪言而賜翠竹之二字。

【道三家記】武田藥品工業杏雨書屋藏。以下〈杏雨〉と略之。

作者道治の師が玄朔（二代目道三）、その初代道三の昔の齋名が「雖知苦齋」なのである。この齋名は仏典に拠ったもので、この名を付して刊行された医書は多く、幕末にまで及んでいる。他に「知苦齋」を名乗る医師も見当らず、「書言字考」もこの道三の齋名を採録したのであるうか。傍線部に注目したい。道三は勅命により「知苦」を「竹」に改めた。竹齋を藪からの発想で、「恨みの介」を「いらみの介」にもじったのと同様に「知苦」を「竹」にもじった名だとするならば、その同様の変遷が既に道三の齋名に於いて為されていたのである。この同様の变化、及び「ちくさい」という特殊な名から見て、当時の読者達は「竹齋」という名に即座に曲直瀬道三を思い浮かべたのではないかと思う。まして作者はその曲直瀬の門下生である。先の「医者くどき木やり」に道三と竹齋の名が列記されるも偶然ではなく、両者が同時に想起され得るものであったことを示しているよう。道三は単に医師として高名であったばかりではなく、諸芸に通じ、広い交遊関係を有し、後述するが、「醒睡笑」などの咄本にもその名が散見する流行の医師であった。寛文元年の『小児療治集』には末尾に伝記が添えられ、寛文期に至ってもその行状は衆人の目を惹くものであった。道治はその話題の道三、そして自らの師であり、また秀忠の御伽衆でもあり、やはり咄本にそ

の名が見える玄朔（二代目道三）の二人を念頭に置いて、初代の齋名をかすめて「竹齋」を作りあげたのではないだろうか。

以下、この仮説に従って二人の道三の事蹟を重ねてこの作品を見たい。

## 二 東下り、京見物について

「竹齋」は京見物、東下り、名古屋での藪治療など個々の咄によって構成され、一見それらの間には何の連関性もないように思われる。まず、その冒頭で「国家慶び長き時とかや」と慶長に時代が設定されていることと内容の連関性が見出せない。これは単に先行作「恨の介」に倣ったに過ぎないのだろうか。しかし「恨の介」が実際の慶長年間の事件を素材にしているのであれば、「竹齋」の慶長という設定にも実際の慶長年間の事件を考へることが許されよう。

慶長十五年、讓家聲於嫡元鑑自退居矣。嘗隨台德源君之台駕移于東武帝。得恩喚甚渥。  
（曲直瀬家譜）玄朔（杏雨）

徳川の招聘により玄朔が東下りしたのが慶長十五年（一説には十三年）。竹齋の東下りの慶長という年代はこの玄朔の東下りを念頭に設定されたのではないだろうか。そう捉えるならば、次の物語の大団円ともうまく呼応してくる。

治めざるに平かなれば、民の戸鎖し鎖さざりけり。誠に直なる御代のしるしとかや。

この徳川賛美も無意味に付け足されたのではなく、徳川の愛顧を恃む名医玄朔の東下りを藪医竹齋に演じさせたのだと考えると、その結語として相応しい一節である。更に同様の視点で東下り前の豊国社参拝を見てみる。

豊國大明神に参りて、そもく當社大明神は先の関白秀吉公の御靈跡なり。今時移り世変じて、社頭大破に及べり。

この背景に次の玄朔の事蹟があろう。

初隨織田信長及豊臣秀吉而仕東照神君台德源君。皆得眷顧。嘗隨台德大君之台駕来于東武。金城前即賜大第居之。（曲直瀬家譜）

嘗て玄朔は秀吉に仕えた。しかも秀次の反乱の煽りを受けて説経の小栗の如く常州の寒郷に流される程豊臣に近かつたと伝えられる。<sup>(6)</sup>その玄朔が時勢の然らしむるところとはいえ、豊臣を滅ぼした徳川の招聘により江戸へと赴く。徳川賛美の前段階に荒廃した豊国社の前で「今時移り世変じて」と感慨に耽る竹齋、その姿に東下り前の複雑な玄朔の姿が髣髴としよう。

この東下りの一連はいみじくも玄朔の東下りと照応する。そして時代も同じく慶長である。竹齋は玄朔という作者の師の行動をパロディとして演じる庸医として想定されて描かれたのだと思う。このモデル論によって立てば、これまで連関性がなく思われてきたこの作品に、一つの連関性を与えることができるように思われる。特に竹齋を傍観者に追いやってまで記される上巻の京見物を、その断絶

が甚しく思われる下巻の葎治療との連関性という視点で考察したい。

ある時、天下の碁打本因坊と参会ありし時、紹巴口中にて連歌を吟ずる。

まず本因坊と紹巴の逸話が記されるが、この逸話を記す意味、「ある時」や「参会」がどのような場なのかよく分からない。碁打の本因坊と連歌師の紹巴と医師竹斎とは全く没交渉に思われる。そこで竹斎を玄朔に置き換えてみる。玄朔と紹巴は度々連歌の座に同座した。例えば慶長六年正月二十六日の「何松連歌」では紹巴が発句、挙句が玄朔であり、玄朔は紹巴、昌叱の十二句に次ぐ九句をも採られており、二十九日の「何路連歌」は発句が昌叱、脇が玄朔、第三句が紹巴である。管見の限りでは、紹巴が玄朔の連歌を評価し始めたのは慶長五、六年頃である。この連歌について、曲直瀬家に伝わった家書の目録「今大路家書目録」を繙くと次の記述がある。

連歌無言抄 三冊。書本。本因坊献上。跋此無言抄之外題ハ被染

勅筆トアリ。

慶長四年也。

この「無言抄」は、次の奥書を持つ紹巴の關係する連歌書である。

此無言抄之外題者被染勅筆<sup>ヲ</sup>大覚寺殿一品親王御奥書也。一読之次上人依所望記之而已。慶長四年神無月上旬 法眼紹巴印判

この連歌書を本因坊が曲直瀬家に献上したのである。時に慶長四年、玄朔と紹巴が懇意になる直前である。両者の連歌の同座にあたり、本因坊が多少の働きをしていたのであろう。とにかく曲直瀬では、「連歌といえば紹巴」と本因坊の二者の名が出るのが自然な雰囲気であったと思われる。この局面でもやはり玄朔の事蹟を照らし合わせると、その逸話の語られる場や意味を理解できる。

同様に上巻に見える能や蹴鞠等の諸文化人達も、金春や飛鳥井などその数人は曲直瀬の診断書「医学天正記」に名が記され、また道三が御伽衆であったことを考え合わすと、全て道三と交流があつてもおかしくない人物達である。この京見物を例えば「鹿苑日録」に「次回道三宅、錢東國行。不面而帰矣。踏鼈一足為錢別。」と記されるような玄朔の東下り前の知己との惜別のパロディだと考えたい。そう考えると、冒頭の時代設定、豊国社参詣、最後の徳川賛美とも連関性を見ることができ、筋としても不自然さはない。そして竹斎がかかる曲直瀬の交遊の場、及びそこで交わされる教養ある逸話、単に眺めるのみの形で描かれる意図が読み取れる。竹斎を名医曲直瀬に対峙させ、その栄耀を冷やかに嫉む貧苦の葎医として印象づける為には、この上巻の各局面はいずれも不可欠なものである。竹斎に曲直瀬のパロディを演じさせる為には、いきなり葎治療から始まったのでは意味がない。竹斎の「葎」はあくまでも名医曲直瀬に對しての「葎」であり、初回道三の齋名を持つ竹斎が曲直瀬の栄耀を嫉む「にらみの介」を連れる人物であることを最初に描かなければ、「葎」治療の咄は描けなかつたのであろう。この観点から引き続き後半の葎治療を見てみたい。

### 三 名古屋での治療について

まず菽治療の地として選ばれた名古屋、この地と曲直瀨との関わりはあるのだろうか。

文禄元年壬辰。倍侍秀吉于高麗陣中。而先登之士自朝鮮捆載之秘籍萬卷。其間得一溪手書之啓迪集#拙庵壺印。秀吉奇之。乃賜之玄朔。  
〔曲直瀨家譜〕玄朔

玄朔は秀吉に従い九州の名護屋に赴き、その折に初代道三の自筆書と拙庵の印を入手したという。この話が曲直瀨では伝説として語り継がれていたことは、次の「家什目録」〔今大路家記〕（杏雨）の記述からも窺えよう。

拙庵印 一箇。文禄元年陪從秀吉于肥之名護屋之時、賜正紹曰、自今以是欲調棄護封之印。正紹謝命之辱退。

いみじくも名古屋はこの玄朔の名譽の地の名護屋と対照することができる。曲直瀨の伝説の地を菽治療の地にとりなして、先の東下りと同様の滑稽味を描いたのではないだろうか。

では、荒唐無稽とも思える菽治療の羅列にも同様の滑稽味が見出されるのだろうか。順を追って曲直瀨流と対照してみる。

まず瘡の治療では、初めに脈を取り、次いで症状を問う問診を滑稽に描くが、これが意外にも次の曲直瀨の家訓（一切紙）冒頭・五十七ヶ条）に従っているのである。

一 察<sup>レ</sup>脈證而可<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>病名<sup>ヲ</sup>事。  
一 可<sup>レ</sup>彈<sup>ニ</sup>四知（筆者注、色を望んで病を知る神、声を聞いて病を知る聖、証を問うて病を知る功、脈を診て病を知る巧）之術<sup>ニ</sup>事

更にその具体的治療として、古畳をかぶせるなどの「醒睡笑」にも載る菽治療を記すが、これも「節<sup>ニ</sup>飲食<sup>ヲ</sup>、避<sup>ク</sup>風寒<sup>ニ</sup>、遠<sup>ク</sup>レハ、房勞<sup>ヲ</sup>、無<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>愈者<sup>ニ</sup>」（啓迪集）瘧疾門」という曲直瀨流と照らしてみると荒唐無稽とは言えない。一応は曲直瀨流に適っているのである。

次に眼に銑屑が入った鍛冶を磁石で治す。

竹齋眼を見るよりも、心得たりと言ふままに、何かは知らず黒焼を巾着よりも取出し、続飯に押し混ぜ紙に塗り、

狂言「磁石」を使ったとされる荒唐無稽な治療に思えるが、これも次の「金創秘伝」（浅見恂齋、天正六年）の記述と照らしてみると金瘡の治療法の一つであったことがわかる。

右等分二細末シテ。ソク飯<sup>ヲ</sup>押合テ疵ノ口ニ付テ。上ニハ青木葉ヲ數テ其上ニ置テ黒焼ニシテ米酢ニテネリテ疵ノ口エ可入。ネフリ<sup>ノ</sup>入タラハ。ウスソクイ、瓜實ニ丸メ可指。鉄ノ矢ノ根ナラハ。磁石ヲコソケテ付薬ニ加ヘシ。

この金瘡の治療法を眼病に転じさせたのが竹齋の菽治療なのである。

つまり竹齋の治療は荒唐無稽な根も葉もないものではなく、正当な治療を踏まえたものなのである。その正統をわざと誤らせた所に「藪」の意味や滑稽味を持たせたのであろう。この場合、曲直瀨では「如鐵不出、鼠肝塗之（鼠腦亦佳）即出。」（啓迪集）損傷門）と磁石を用いない。誤りながらも先の瘧の治療では曲直瀨流、ここでは他流に従うといった形で結果的に曲直瀨の落ちこぼれとして竹齋を描き、先の東下りと同想の滑稽味を醸し出している。しかも「醒睡笑」にも載る既成の笑話や狂言「磁石」等をうまく填め込んで描いた点に作者の功があるのであろう。

次に「竹齋」では、医書揃えが記される。

読み置く医書はどれ／＼ぞ。先一番に大成論、脉経、能毒、運氣論、序例、難経、回春や医学正伝。或問に素問靈樞、諸本草、医林集要、源流まで風の吹く夜も吹かぬ夜も雨の降る夜も降らぬ夜も、灯し火のもとに眼を晒し、かたのごとく学問を努めたり

この医書揃えは、当時の当り前の医書の羅列とみなされがちである。しかし、この医書揃えは立派すぎる。例えば後の好物揃えの「川類の丸焼き」などと同様に、荒唐無稽な書名を織り込むことができた筈である。竹齋を数医として描くのであれば、この立派すぎる医書揃えはその目的と乖離していないよう。この医書揃えを読むと傍点部の二点が気にかかる。

一、中国の医書が並ぶ中に唯一本邦の医書「能毒」がある。著者は勿論、本稿で狙に乗せている曲直瀨道三である。

二、「型の如く」と記す。この医書揃えには拠るべき何かの「型」

の存在を思わせる。

以上の二点を考えると、その「型」はやはり曲直瀨の中に求めるべきであらう。

### 道三在洛之講釈之記

難経 全九集書目 本草序例 大成論 十五卷 切紙四十通 察病指南 和剂指南 医学源流 運氣論 新本草古文序 丑時 明堂灸通 日用薬性能毒 明醫雜著 正伝或問 崔真人脉訣十書（以下略）  
（「當流宜學之目錄」〈杏雨〉）

この道三の講釈した書と、「啓迪集」末尾の引用書目を合わせることは「竹齋」の医書揃えと重なる。恐らく道治は自身の受講経験を活かしてこの医書揃えを記したのであろうが、とにかく滑稽性を二の次にして竹齋を道三の講釈を受けた人物として描きたかったのである。それを気づかせる為に、「型の如く」や「能毒」などと殊更に記したと考えられる。

では竹齋を道三の講釈を受けた人物にしなければならない必要性があるのだろうか。講釈を受けた筈の竹齋が次の落馬の治療では「宇治頼政」の話を医書だと偽り治療する。

此醫書の講釈は（中略）醫書に外の、療治をば此竹齋はせぬと言ふ。あたりの人々横手をはたと（写本、へたと）打ち、あれ程物知り竹齋なれば療治に疎かはあらじと言ふ。

まさしく道三を気取って医書（謠本）を証左に「講釈」をする。医

書揃えは単に銜学的に記されたのではなく、この場面の布石であった。竹齋が道三の講釈の経験者である為、この謡本による猿まねの藪講釈、衆人の絶賛という滑稽味が生じてくるのである。

道三の講釈といえは、かの近松門左衛門の弟、岡本一抱が次の様に記している。

医書大全ノ病論ヲノミ抜集テ如レ此耕舌スルコトハ、何ノ代ヨリシテ何レノ人ノ致シ初タルコト難ク知。或人曰ク故道三ノ作ナリト。

(医学講談発端弁) 元禄十三年)

此重刊證類本草ノ序ヲ、本朝ノ天正十年二道三先生始メテ講セリ。(同)

道三の講釈はその先駆者として評価され、後々まで人口に膾炙する程有名なものであった。また医人のみに語られるのではなく、咄本「戯言養気集」上に次の紹巴との逸話が載る。

古道三一溪、医書講釈、聴聞の人、毎朝百人計有。其中に年頃十五六七八なる人多かりしを、紹巴法橋見給ひて、涙ぐませ給ふ事しばしありぬ。(中略)翠竹院興をさまひて、其方の芸をうら山しく存ずる。なぜなれば、そもじ程の連歌にてさへ、人をし殺ひたと云さたはないほどに。

誇張もあるうが、毎朝百人もの若人を集めた道三の講釈は、医人のみならず当時の文化人の関心をも集めた。竹齋の藪治療が曲直瀬を踏まえたものである為には、この藪講釈は必ず描かねばならない

局面であつたのであろう。

この次の瘡の治療も同様の描き方である。

竹齋薬を与へける。まづ好物を書いてやる。

一、鶯の焼物、雀の酢、烏の味噌漬、牛房の丸焼、鷹の塩漬、もずの焼鳥、梟の焼鳥、鯨の煮物、夜鷹の油揚げ、鶯の酢入り、川瀬の丸焼き、きじの酢。

好禁物を記すのは医書の常套ではあるが、竹齋の言う好物は出鱈目で結局は治療に失敗する。この好物の殆どが肉類であることに留意して、次の曲直瀬の治療法と照らしてみる。

○瘡瘍(飲食、居處)之忌戒

湿麪、灸燂、煎炒、醃藏、法酒、肥牛羊鶏鵝虫魚類、宜レ禁之。(啓迪集)瘡瘍門)

曲直瀬流では肉類の塩漬等全て禁じている。竹齋は全くその逆を行すが、これもその藪加減を強調する為に殊更に肉類を列記したのであろう。その描き方及び謡本「西行桜」を用いての藪講釈も、前の医書揃え、落馬の治療の延長線上にあり、全く同想である。

このように曲直瀬の落ちこぼれとして強調された結果が次の局面を導き出す。

又さる人の患ひに竹齋薬を与へける。少ししるしも見えければみなく申けるやうは「あの竹齋づれにか、りつ、後の患ひいかか

せん。よき薬師にか、れ。」とて法印法眼呼び集め、脈をこそはとられける。初めより竹斎は病者のそばにおりけるが、法印見舞ひと聞くよりも、貧なる薬師の浅ましさは成りは見苦し、急ぎ立ち退かんとや思ひけん。(中略)戸板障子にけつまづき、前後不覚に慌てつ、大庭さして逃げにけり。

傍線部の様に効験があつたにも関わらず、法印法眼に鞍替えされる。本来なら怒つて然るべき竹斎がなぜか大慌てで逃げ帰る。竹斎は何故に法印法眼(整版では典薬)と対面するわけにはいかなかつたのか。ここで思い当たるのが先の「御典薬の道三に……竹斎なんどが」という当時の認識である。当時の二人の道三の官職は次の通りである。

道三 天正十一年十一月十一日法眼宣旨

慶長十三年 四月 四日法印宣旨

玄朔 天正 十年 三月十三日法眼宣旨

天正十四年十二月 二日法印宣旨

親純 天正 廿年 二月廿八日典薬助宣旨

〔今大路家記〕勅賜目錄(杏雨)

つまり竹斎はここで師の曲直瀬の面々と遭遇したのである。落ちこぼれとして描かれた竹斎が大慌てで逃げ去るのは当然であった。

以上の救治療、医書揃え、教講釈、法印法眼との遭遇は、いずれも竹斎が曲直瀬の落ちこぼれであることを前提とした滑稽性を共有している。曲直瀬流の誤用、猿まねの講釈、曲直瀬との遭遇に際しての周章狼狽、この何の脈絡もなく思われた各場面は曲直瀬を軸にする一つ一つの物語性を有して、先章の東下りとも連関してくる。結

論を急ぐ前に同じ観点で竹斎の奥の手、膏薬について考えてみたい。膏薬による救治療は全編の中でも特に目を惹く滑稽なものである。井戸に落ちた子供を膏薬で吸い上げようとして溺死させる咄などは、荒唐無稽の最たるものに思える。しかし、道三自筆の膏薬秘伝書「瑠璃宝蔵記」(杏雨)に次の興味深い膏薬の記述がある。

膏薬秘方 阿蘭陀流無双之妙膏ナリ。

柳河内ノ守正成卿累代之秘伝千金集伝之良薬也。

膏薬 此膏ハ天下ノ妙膏大秘方也。楠従三位河内守橋正成卿累代

相伝ノ秘劑也。於和州十津川、柳正統次郎左衛門尉、正盛

(注、初代道三)ニ授伝。正成朝臣銘ヲ碼磁膏瑠璃膏ト称シ給。以是膏令療ニ一切ノ腫物悪療金瘡悉無不愈也。

碼磁膏 膿ヲスイ、シシヲ上、能愈ス也。

阿蘭陀流、楠正成伝来と怪しげに権威づけられ、初代道三に直伝された大秘方であった。一切の腫物悉く愈えないものはないとされる。万能の妙膏で、よく「シシヲ上」と記される。作者はこの秘方の噂を聞き、「シシヲ上」を肉を吸い上げると俳諧的に取りなした万能の膏薬を竹斎に与えたのであろう。そう考えると、子供の肉体を吸い上げる、為に膏薬の万能性を頼む竹斎の滑稽さが理解されると思う。この子供を吸い上げる咄に先立つて、次の妊婦が喉に青梅を詰ませる咄が記されている。

巾着よりも磁石を取出し、ひた回しに回しけれども出ざれば、「心得たり」と云ま、に吸い膏薬を取出し、口へたと貼りにつ

り。梅はさうなく出たりけり。

前に鍛冶で成功した磁石をまず用いるが、今度は効果がない。そこで奥の手として曲直瀬秘伝の膏薬を取り出し治療に成功する。しかし、このままでは彼が曲直瀬流の名手となつてしまい、これまでの竹齋像に反してしまふ。作者は次の局面を付さねばならなかつた。

良き膏薬の手柄には、目と鼻一所へ吸ひ寄せ目の玉二三寸吸ひ上ぐる。「こはいかに」と言ひければ、竹齋申けるやうは「梅の療治は心得たり。目鼻の事は知らぬ」と言ふ。

竹齋の失敗を描かなければこの作品の滑稽性は生まれぬが、直前の青梅の療治とこの局面とでは微妙な断絶があろう。強引に失敗させようとする不自然さを感じられる。竹齋が「梅の療治は心得たり。目鼻の事は知らぬ。」と嘯くのも当然である。この言ひ掛かりに近い不自然な付会は、手慣れぬ作者が馬脚を踏わしたもののなのだろうか。或いは何らかを踏まえた意図的な付会なのであろうか。

孫仙少女膏、黄栢皮<sup>ニ</sup>、土瓜根<sup>ニ</sup>、大棗<sup>セ</sup>、右同研細<sup>ニ</sup>、<sup>為</sup>膏<sup>ヲ</sup>。常<sup>ニ</sup>早起<sup>キ</sup>化<sup>レ</sup>湯<sup>ニ</sup>洗<sup>テ</sup>面<sup>ヲ</sup>。用<sup>コト</sup>旬日。容如<sup>ニ</sup>少女<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>治<sup>ス</sup>。浴尤<sup>為</sup>ニ神妙<sup>ナ</sup>。

〔啓迪集〕整容門)

曲直瀬の整容法はやはり膏を使う。竹齋の女の顔を変形させる失敗は、この治療法の誇張であろう。すなわち曲直瀬の種々の膏を混同させて、結局竹齋を曲直瀬の落ちこぼれとして描き、滑稽性を持た

せている。そう考えるならば、傍線部「良き膏薬の手柄には」の皮肉な行間が着て取れよう。

つまり、竹齋の療治は、まずその地の名古屋が曲直瀬で語り継がれる名護屋を利かせたもの、藪講釈も当時評判の道三の講釈の猿まねであり、藪治療もその大半が門人なら誰もが知る「啓迪集」等の曲直瀬流にその原型を求めることができる。いずれもその誤用や誇張によつて滑稽味が生じている。やはり曲直瀬流を修学した作者をして、初めて描くことを可能にさせた場面である。その滑稽性は曲直瀬流を知らなくとも感じられるが、細部に互る作者の狙いは曲直瀬のパロディを演じさせる点にある。それが前半の東下りとも連関してこの作品の基本的な姿勢となつていく。

#### 四 道三咄の流行

では、竹齋が曲直瀬のパロディを演じる藪医だとしても、その滑稽性が理解できる読者はいかなる人達であつたのだろうか。曲直瀬を知る医師達に限られるのであろうか。この読者の問題を論じる前に、咄本に散見する初代、二代の道三の咄（本稿では、「道三咄」と呼ぶ）の流行について述べてみたい。

医師道三一溪へ、顔色衰へたる人来て、御無心の事に候へとも、氣根の落つる薬をたんと下され候やうにと申けり時、道三聞給ふて「これハさて珍しき所望でありや。見かけとハはらりと違ふた義を承る。」と仰られしかば「いや我等の用にては御座なひ。女どもに食へさせたく存候。」と申たれば、「何方も左様にある

や。」と大笑ひになつた。

「戲言養気集」下

この咄は「醒睡笑」巻六や「昨日は今日の物語」下巻にも見られる。しかし、道三咄の特徴はその錯綜性にある。この咄は「醒睡笑」では無名の医師、「昨日は今日の物語」に至っては道三と稱を争う竹田法印の咄となっている。先の道三の講釈の咄も「昨日は今日の物語」では無名の医師の咄となっている。同様に道三咄は咄本等に散見するが、どれとして確立したものが無い。例えば、信長が天下をとった祝いに紹巴が二本の扇を献上した咄(甫庵本「信長記」三)が、「醒睡笑」巻八では道三のことと記されるなどはその錯綜性の顕著な現象であろう。つまり、道三咄が持て囃される勢いに乗じ、ある咄は道三に仮託され、ある咄は逆に道三の名を外して一箇の笑話として独立するといった錯綜性が生じたのであろう。それはもはや真偽を問わずに道三咄が人気を博していた証とも言える。その盛行の様子は、次の甫庵本「信長記」巻十四の記事がよく伝えている。

又洪屋方左衛門尉申しけるは、この比路中に翠竹院道三、福の神十子に仮名実名など付け侍りしかば、京童、屏風疊紙などに書き記し口号くごみ候と語り申しつるに、其はいかやうなる事ぞと問ひ給ひし時、齋太郎為持、内寝三郎仲吉、斟酌三郎未安など未だ語りも果てざるに、信長公御気色変り居丈高に成り給ひて、いやとよ。其は工商等には福神ならんが武家の為には貧神なり。吾が党の福神は、知人大郎国清、才二郎国綱、剛三郎勝光等なり。

小瀬甫庵は道三と同時代の医師であるだけにその記事は信憑性が高

い。道三の名付けた齋太郎という語は悪口好きの喜しい京童の嗜好に適い、扇にも書かれ貴人伺候の場でも語られたと言う。道三の人氣を推して測れよう。勿論この咄も「戲言養気集」にも記され、また吾太郎の語は「醒睡笑」の部立ての一つとなっている。道三咄は当時の咄の場を席巻していたと言っても過言ではないだろう。

更にこの道三咄が談笑された場を考えたい。先述した様に道三自身御伽衆であり、当然貴人伺候の場で語られたであろう。事実、先の「信長記」や、「信長記」の異文を伝える武辺咄を書き留めた「白石秘書」にも、道三咄が記される。又、当時の社交場を記す「鹿苑日録」にもその名が記されている。その他、<sup>(10)</sup>五山の僧にして狂歌の第一人者の雄長老との交遊も指摘されており、実際に「後撰夷曲集」にも道三の狂歌が採られている。曲直瀬の診断書「医学天正記」には灰屋紹由、飛鳥井、近衛、金春などの文化人の名が散見し、貴人や文化人、流行の狂歌を興じる人達の談笑の場で道三咄が流行していたことは想像に難くない。都の錦が「昔より今に至りて見ざめせずして面白き物」(「元禄太平記」巻六)と評した「為患痴物語」(寛文二年)巻三に利口咄の野間藤六と道三との逸話が記されていることも、この道三咄の流行の程を示している。

この道三咄の流行、及びその語られる場を考慮すれば、竹斎を道三のパロディとして看取できた読者は、独り医人のみではなく、当時の仮名草子の読者一般だと思われる。彼らの中には実際に治療を受け、身をもって曲直瀬流を知る人物も多かったのである。むしろ、道三咄の盛行に乗じて「竹斎」が生まれたのではないだろうか。以下、この点について述べてみたいと思う。

叙上の如く、曲直瀨のパロディを演じる藪医として竹齋を描いたと考えることが許されるならば、その命名、設定年代、東下りの一連の描き方、藪治療等に共通の発想による滑稽味を見ることができ、そのモデルとして作者その人を宛ててもよいが、そうとは考えずに曲直瀨流を修学した庸医一般をモデルとしたと考えたい。当時、曲直瀨流を標榜する庸医は身辺に幾人もいたわけであり、彼らの中には竹齋ほどではないにしても、曲直瀨流治療の生合点によって失笑を買った藪医がいたのは当然である。竹齋はかかる藪医をモデルとしているのであろう。「竹齋」の後半は個々の藪治療の羅列であり、いわば竹齋の名のもとに統一された笑話集の趣がある。既に中村幸彦氏は「竹齋伝説なるものが古くからあり、それを素材として磯田道治がたまたまある時期に本にした」という指摘をされておられるが、本稿で述べた様に竹齋の藪治療は曲直瀨流治療を踏まえており、しかも竹齋の名が初代道三の齋名をかすめたものであれば、氏の言われる竹齋伝説の母胎となったものは、現実のあちらこちらで耳にしそうな曲直瀨流を標榜する庸医達の失敗談であったのではないだろうか。

古今を問わず、藪医師の咄は滑稽味を生み出し易い。道三咄がいくら流行しようとも、名医の道三の咄では滑稽味に限界があろう。そこでその道三咄の変型として、道三の門下の落第者の咄として生まれたのが竹齋の原型であろうと思う。談笑の場で道三の咄が盛んに取り沙汰されているのであれば、その興味が道三の弟子、とりわけ曲直瀨流を標榜するのみの庸医の咄に及ぶのは極めて自然であらう。そういつた咄を、流行に敏く、又曲直瀨家に通じる道治が、謡、狂言、既成の笑話、はやりの狂歌や書簡体、「伊勢物語」等の諸文

芸を巧みに利用して、初代道三の齋名をかすめた一人の主人公で統一し、二代目の道三の慶長の東下りを骨子に一篇にまとめたのが古活字版「竹齋」であろう。この諸文芸を巧みに利用した点に作者の功をみたいと思う。直截に下巻の藪治療から筆を進めれば、「竹齋」は余りにも無風流な笑話集に過ぎなかったであろう。それを曲直瀨の事蹟を踏まえながら、都の文雅や華奢を描き、藪治療の前後を風変わりな道行文で飾り、処々に狂歌を配し、更に諸文芸を利用して文辞を凝らして、「竹齋」を単なる庸医の笑話集から、幽かな雅趣を漂わせる物語に仕立てた所に作者の筆の冴えが感じられる。

曲直瀨を知り、道三咄に興じていた人達にとつてみれば、これほど滑稽で気の利いた作品はなく、次から次へと続編を望む歓声があったことは十分に考え得る。その結果として、整版本や「竹齋狂歌物語」等の後続作が道治の手を離れてさえ生まれつつののだと思われる。尚、整版本と古活字本ではその性格を異にしている。本稿では古活字本について論じたが、整版本以後については稿を改めて論じてみたいと思う。

#### 注

- (1) 野間光辰氏「御伽草子、仮名草子」解説(角川、鑑賞日本古典文学26)
- (2) 前田金五郎氏「竹齋物語集」解説(近世文藝資料11)
- (3) 桑田忠親氏「大名と御伽衆」
- (4) このことは既に花田富士夫氏が次の様に述べておられる(「大妻女子大学紀要」23号)。

「作者富山道治は曲直瀨玄朔(道三)に学び、「竹齋」の書名も道三の号「知苦齋」に発したと思われる。」

しかし、氏は雖知苦齋を初代ではなく二代目の齋名とされており、また「知苦」から「竹」への変化については言及されておられない。

(5) 1に同じ。

(6) 慶長元年。秀次坐叛唐自裁。故秀吉令玄朔等阿三輩就佐竹義宣。謫居于常州。  
(一) 曲直瀬家譜)

(7) 「連歌合集」(国会図書館蔵)

(8) 1に同じ

(9) 鈴木業三氏「醒睡笑研究ノート」

(10) 小高敏郎氏「近世初期文壇の研究」

(11) 日本古典文学全集「仮名草子集 浮世草子集」解説

付記、曲直瀬の資料について武田薬品工業、武田科学振興財団に便宜を計って頂いた。末筆ながら、深く感謝の辞を申しあげたい。

— 大阪大学大学院博士後期課程在学 —